



志度高だより 一飛翔の窓一

第93号
(H22.5.6)

「それでも待つ」

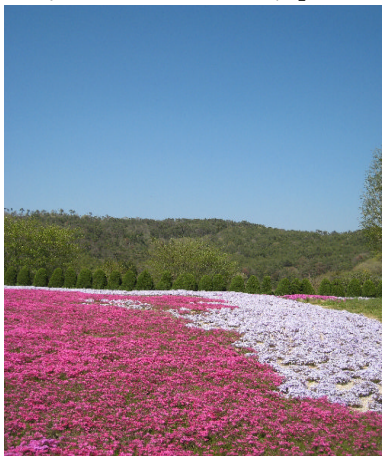
突然の寒波襲来。日本中が震え上がった。皐月もすぐそこというときの寒波だけに、体だけでなく心まで冷え込んでしまった。東京では雪。季節外れの落とし物に、クリーニングに出そうかと思っていたコートをまたぞろ引っ張り出して着た。そんな電話があった。イルカの名曲『なごり雪』が頭にのぼってきた。「季節外れの雪が降ってる 東京で見る雪はこれが最後ねと 淋しそうに君がつぶやく 名残雪も降るときを知り ふざけすぎた季節のあとで」

東京に季節外れの雪が舞ったちょうどその日、私は高松のとあるデパートにいた。と言っても、金のない私のことデパートの中ではなく、まあ軒下で雨宿りというところだ。霧雨に近い細かい雨が舞っていた。夕暮れどきとはいえ、まだそんなに暗いはずなのに、薄墨をまいたように暗い。すでに水銀灯が灯り、そこから吐き出される銀色の光が細かな粒子になって煙っている。その銀幕に一つの黒いシルエットがあった。女だ。それも若い。くるぶしのところがきゅうと細く、そこから何の拘束も受けずにすらっと伸びた足が、冬物のベージュのコートへと消えていた。彼女も季節外れの寒さに、用意していた春ものの衣裳を諦めた口かもしれない。それより彼女のほっそりとした足は、銀霧の中だったせいもあるだろう、中年の私の心をくすぐるほど美しく映った。この芸術的な足も時の洗礼を受け、やがて贅肉が付いて丸く太っていくのか。勿体ない。肉体による美の創造は短く儂い。だから彫刻があるのだ、きっと。



普段、女の人をじろじろと観察することはまずない。でもその日は違った。好奇心から目の隅で彼女の動きを捉えていた。彼女はデパートのテラスの下に身を寄せていたかと思うと、何かに弾かれたように水銀灯の下に歩み寄る。肩のところで切り揃えた直毛がうっすら濡れ、淡い光を発する。くすんだ銀色の向こうに捜し物があるのか、じっと抉るような眼差しを送っている。が、捜し物は見つからない。ゆっくり踵を返し、少しうなだれげみに再びテラスの下に身を寄せる。これを二、三度繰り返した。待ち人ありだ、な。でも今時のこと、携帯電話で簡単に連絡が取れそうなもんだが……。若さに似合わぬ古風な振る舞いが、中年男の気に留まったまでのことである。

そこに「おい」と肩を叩かれ、にゅっと髭面が突き出された。霧雨に描きかけた幻想がすっかり霧散していった。「無粋なやつだな、お前ってやつは。いつも俺のささやかな喜びをぶち壊しやがる」水銀灯に視線を流しながら言うと、「彼女、なかなかいいね。自分がもう少し若かったらなんて考えていたんだろう」と無粋なことを返してきた。おまけに鼻の穴から煙草の煙を機関車のごとく吐き出している。「見てたのか。悪趣味だな」「えらく熱心に彼女を見てると思ってね。誰かに似ているのか」「まあね」こんな愚にもつかぬ会話がしばらく続いた。



「考えてみりゃ、人間の一生ちゅうのは待つことかもしれねえな」顔に似合わずしんみり言った。顔はともかく、かつて文学青年を自称していただけのことはあって、ときどきハッとしたことを言う。「そうかもしれない」と素直に返してしまった。待つ、か。恋人を待つ。列車を待つ。天気回復を待つ。注文した料理を待つ。チャンスを待つ。傷が癒えるのを待つ。病床で死を待つ。期待を胸に秘めて待つこともあれば、暗い気持ちで待つこともある。この世の生きとし生けるものすべてが、待つという行為を繰り返す。

忠犬ハチは帰らぬ主人を待った。イーノック・アーデンは妻のもとに帰ることを生きる力に変え、待った。南極の昭和基地では、置き去りにされた太郎と次郎が氷原の彼方に観測船を待った。私も待っているものがある。こんなろくでもない世の中なら、垢のようにたまったしがらみをかなぐり捨てて、無に生きてやる。そう思った。なのに性懲りもなく待っている。人は待つ。理由は？ 何を？

理由などないのかもしれない。それでもピリッとして全身をカッと熱くさせるもの、つまり人生のスパイスってやつを待つ。ときには裏切られ傷つく。それでも待つ。なぜなら待つことができるから生きることができるからだ。

霧雨の中、彼女はどれくらい待ったのか。待ち人は来たのだろうか。それとも……。彼女の待ち人の代役ができなくなるほど歳を取った今の自分は、果たしてあとどれくらい待てばいいのか。待つことに疲れなければいいがと思う。待つ回数が多いというのは、それだけ若く未来に託す期待も大きいということである。しかし裏を返せば、疲れ果て人生を諦める確率も高くなる。